

## 奈良県十津川村におけるツーリズムの展開と現状

— 湯泉地温泉・上湯温泉・瀨峡を中心に —

河本大地	奈良教育大学社会科教育講座 (地理学)
焦自然	奈良教育大学学部研究生
胡安征	奈良教育大学大学院在学
保坂真	奈良教育大学学部在学
嶋田知加子	奈良教育大学学部在学

## Development and Current Situation of Tourism in Totsukawa Village, Nara Prefecture :

Focusing on Tosenji Onsen, Kamiyu Onsen, and Dorokyo Gorge

KOHMOTO Daichi

(Department of Geography, Nara University of Education)

JIAO Ziran

(Undergraduate Researcher, Nara University of Education)

HU Anzheng

(Graduate School of Education, Nara University of Education)

HOSAKA Makoto

(Undergraduate Student, Nara University of Education)

SHIMADA Chikako

(Undergraduate Student, Nara University of Education)

### Abstract

The purpose of this study is to clarify the development of tourism in Totsukawa Village (Totsukawa-mura), Nara Prefecture, and its history, characteristics, and current situation, as well as its prospects. First, an overview of tourism in this disaster-prone mountainous village is presented. Then, case studies of Tosenji Onsen, Kamiyu Onsen, and Doro Gorge are conducted among the major tourist destinations in this village. We offer three proposals based on our research findings.

キーワード：ツーリズム, 山間地域, 温泉, 溪谷

Key Words : Tourism, Mountainous Area, Onsen, Gorge

### 1. はじめに

本研究の目的は、奈良県吉野郡十津川村におけるツーリズム(観光)の展開の経緯や特徴と現状を明らかにし、今後を展望することである。

日本の国土の大半は山間地域である。特に山間地域では、人口の減少や高齢社会化、耕作放棄地の増加、森林管理の困難化、野生動物被害の深刻化、学校統廃合、

医療・福祉をめぐる状況の困難化、産業構造の脆弱化、都市部へのサービス供給の依存度増大、補助金依存の活動の多さなど、山間地域にほぼ共通する課題の多くがより深刻な形で現れている。また、抱えている課題の中には都市部を含む全国に共通するものもあるが、これらに先進的に対処してきた地域でもある。

このような山間地域において、ツーリズムはこれまで「地域活性化の切り札」のように扱われることが多かつ

た。近年の、交流人口や関係人口といった言葉を用いた取組においても重視されている。とはいえ、人口減少・高齢化等が進む中で、観光・交流施設の維持・管理、人員確保などが難しくなっている事例がみられる。山間地域の人々の暮らしにリスペクトの意識をもたない来訪者もあり、消費者行動に関する諸問題も、あまり社会の表には出ないものの存在する。さらには、2020年には新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大による影響を強く受けている分野でもある。

本研究の対象地域とする十津川村は、奈良県の最南端にあり、和歌山県の田辺市・新宮市・北山村や三重県の熊野市と隣接している。紀伊半島のほぼ中央に位置する。村としては、北方領土を除き日本最大の面積（672.38 km<sup>2</sup>）を有する。森林が面積の約96%を占め、これを活用した林業が盛んにおこなわれてきた。7区55大字からなる多様な地域社会を有している。また、豊かな自然や温泉に恵まれ、日本で最も長い鉄線の吊り橋である「谷瀬の吊り橋」等の生活文化遺産も有し、かつ世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の登録資産である大峯奥駈道（おおみねおくがけみち）や熊野参詣道（熊野古道）の小辺路（こへち）が通っている。これらは多くの観光者をひきつけている。キャンプ、釣り、山歩き等を目的とする来訪者もある。

しかし同村は、過疎化・高齢化が顕著である。また、自然災害に見舞われることも多い。1889年に発生した十津川大水害では、豪雨によって土砂崩れ、家屋の全壊、田畑の浸水・埋没・消失などが起こり、168名が死亡した。その後、約2,600人が新たな生活地を求めて北海道に移住し、現在の新十津川町の礎が築かれた。十津川村と新十津川町は同じ村章、町章を使用しており、小中学生の交流研修をはじめとする住民どうしの交流も続いている。また、2011年には台風12号による紀伊半島大水害が発生し、村は全壊18棟、半壊30棟、床下浸水14棟、死者6名、行方不明者6名、重傷者3名という甚大な被害に見舞われた（十津川村、2014）。

このような十津川村は、日本全体が「観光立国」を掲げる一方で人口の減少や高齢化が急速に進行し、かつ大きな自然災害が頻発している状況にあって、学ぶべき課題先進地域としてとらえることができる。筆者はこれまで、河本・劉・馬（2018）において、熊野古道（熊野参詣道）のひとつである小辺路が通る十津川村神納川区を事例に、人口減少や高齢化の著しい山間地域におけるグリーンツーリズムと世界遺産観光の持続可能性の整理・解明を試みた。また、河本・劉・馬（2019）において、十津川村にある3つの温泉地のうち十津川温泉について歴史と現状をまとめ、今後の地域の在り方を考えた。これらをふまえて本稿では、まず村全体のツーリズムの概要を整理したうえで、村内の他の主要観光地である湯泉

地温泉・上湯温泉・瀨峡についてツーリズム展開の経緯や特徴と現状を明らかにし、今後を展望する。

研究方法は、現地での聞き取りと文献調査が主である。2019年4月から2020年1月にかけて十津川村を繰り返し訪ね、各観光地の宿泊施設等の経営者や住民等に聞き取りを行った。また、温泉地・観光地としての変化について、十津川村役場から毎月出されている『村報十津川』（以下、村報）をはじめ、や、観光協会・宿泊施設が作成した資料、既往研究をはじめとする諸々の文献を渉猟した。

なお、本稿ではいわゆる観光を、地域の在り方などを含む広い意味で扱うため「ツーリズム」と表現している。ただし、村行政等においては「観光」という語が通常用いられている。そのため、論文や章・節のタイトルはツーリズムで統一するが、本文や図表においては観光という表現も混在することをあらかじめ断っておく。

## 2. 村のツーリズムの概要

十津川村は温泉等の地域資源に恵まれており、観光産業の発展が未来を築くひとつの道となりうる。主に1960年代から、国道168号の開通などを機に観光地化が目指されてきた。後述のように1985年に十津川温泉、湯泉地温泉、上湯温泉が「十津川温泉郷」として国民保養温泉地の指定を受け、2004年に「源泉かけ流し宣言」を発表した。和歌山県・三重県と接する瀨峡（瀨八丁）は観光地として長い歴史をもつ。キャンプ、釣り、山歩き等を目的とする来訪者もある。

村では、十津川村観光協会が1961年から組織されているほか、旅館組合や民宿組合もある。役場でもこれまでに産業課観光係、企画課観光係、観光振興課、産業課観光グループ等がその時々々に設置され、観光関連施策を展開してきた。

宿泊者数は温泉地、特に十津川温泉と湯泉地温泉が多い（図1）。とりわけ1990年頃にはバブル景気の影響を強く受けて多かった。しかし現在、宿泊者は当時の半数以下にまで減少している。図1にみられる2015年の小さなピークには、2011年発生の紀伊半島大水害を受けた土木建設業等の復興需要や、村を挙げた復興PRの影響があると思われる。

月別の宿泊者数をみると、春のゴールデンウィーク、夏休み、紅葉の時期、春休みに多いものの、6月や9月、冬季には少ない（図2）。月別の入込客数をみると、宿泊者数と似た季節変動があるものの5月と8月のピークが目立つ（図3）。また、このデータには宿泊者数が含まれるが、宿泊者よりも日帰り客のほうがはるかに多いことがわかる。

一方、日本人の観光行動は、団体ツアーから個人や小

グループの旅行に比重が移っている。また、インバウンドツーリズム（訪日外国人の観光）の動向も無視できない。2004年に「紀伊山地の霊場と参詣道」がユネスコの世界文化遺産として登録され、その構成資産のひとつである熊野参詣道（熊野古道）小辺路の歩行者が、特に外国人に関して増えている。同じく世界遺産の大峯奥駈道は、修行のための険しい道ではあるが、沿道の玉置神社については「神様に呼ばれた人しか辿りつけない」等として神秘性が話題になったこともあり来訪者が多い。小辺路沿道の神納川区の事例（河本・劉・馬，2018）や、小辺路および玉置神社に近い十津川温泉の事例（河本・劉・馬，2019）では、インバウンド観光が重要な位置を占めていた。

しかし、村内の宿泊施設の数は減少している。表1～4は、宿泊施設の概要を、旅館・ホテルと民宿とに分けて、1994年と2020年について比較できる形で示したものである。宿泊施設数および収容人員が減少している。特に、旅館・ホテルを中心に、温泉施設の存在が重要な存続要件になっていることがわかる。他方で、1994年にはなかった高価格帯の旅館（表2の11）や、農家民宿（表4の3・4・5）など、新たな宿泊施設も少数ながら生まれている。図4は、両年の宿泊施設の分布図である。

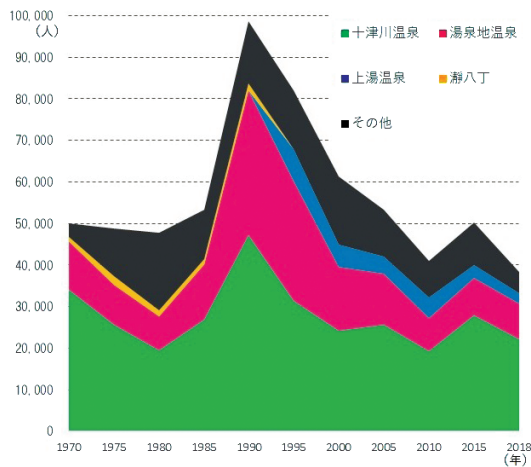


図1 宿泊者数の変化

十津川村観光協会調査資料による。

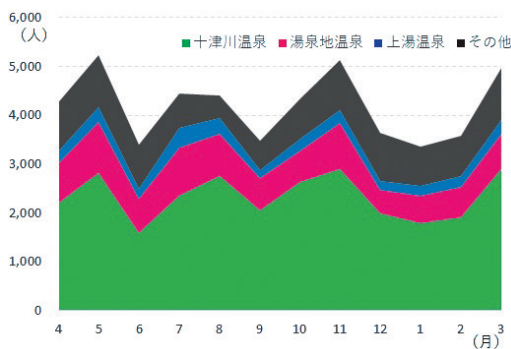


図2 月別にみた2015年度の宿泊者数

十津川村観光協会調査資料による。

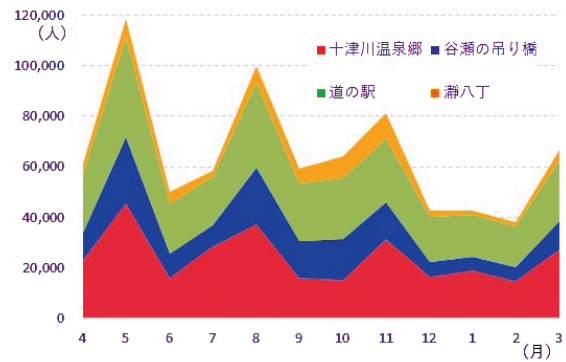


図3 月別にみた2015年度の入込客数

十津川村観光協会調査資料による。

表1 1994年の旅館・ホテル

	旅館・ホテル名	住所	宿泊料金(円)	収容人員
1	田花館	平谷	9,000-13,000	30
2	ことぶき	平谷	8,000-12,000	20
3	えびす荘	平谷	8,000-12,000	25
4	湧山荘	平谷	10,000-15,000	40
5	下湯荘（宿泊のみ）	平谷	5,000	15
6	平谷荘	平谷	10,000-15,000	30
7	山水	平谷	10,000-18,000	70
8	ホテル昴	平谷	11,000-18,000	125
9	十津川荘	武蔵	13,000-15,000	35
10	中村屋	武蔵	8,000-10,000	20
11	むさし	武蔵	13,000	20
12	やど湯の里	武蔵	13,000-15,000	20
13	滝見荘	小原	12,000-15,000	20
14	一乃湯	小原	16,000-	200
15	藤井旅館	上野地	8,000-10,000	20
16	瀨ホテル	神下	10,000-13,000	20
17	神湯荘	出谷	11,000-15,000	80
18	徳秀苑	出谷	13,000-	100
	計			890

1994年4月1日現在。十津川村観光協会(1994)により作成。料金はサービス料込み、税別で大人1人2食付き。着色は温泉のある施設。

表2 2020年の旅館・ホテル

	旅館・ホテル名	住所	宿泊料金(円)	収容人員
1	田花館	平谷	11,150-16,650	25
2	植田屋	平谷	9,800-	15
3	えびす荘	平谷	12,030-	10
4	平谷荘	平谷	12,500-15,500	20
5	静響の宿 山水	平谷	8,500-19,500	24
6	吉乃屋	平谷	14,190-23,910	30
7	ホテル昴	平谷	15,660-19,440	127
8	十津川荘	武蔵	15,000-17,200	20
9	むさし (休業中)	武蔵		
10	やど湯の里	武蔵	14,450-17,750	15
11	湯乃谷 千慶	武蔵	41,190-76,830	54
12	神湯荘	出谷	13,110-19,590	28
計				368

2020年4月8日現在。十津川村観光協会ウェブサイト掲載情報により作成。料金はサービス料・入湯料・税込みで大人1人2食付き(1室2名)。着色は温泉のある施設。

表3 1994年の民宿

	民宿名	住所	宿泊料金(円)	収容人員
1	岸尾	旭	6,000-7,000	12
2	リヴァー	宇宮原	6,000-7,000	20
3	杉の原	谷瀬	6,000-7,000	12
4	ニューつり橋	上野地	6,000-7,000	25
5	志まや	上野地	6,000-7,000	15
6	ますや	川津	6,000-7,000	10
7	水本屋	川津	6,000-7,000	18
8	たまや	五百瀬	6,000-7,000	12
9	香	風屋	6,000-7,000	25
10	花屋 (休業中)	風屋	6,000-7,000	27
11	津川	風屋	6,000-7,000	50
12	富士屋 (休業中)	滝川	6,000-7,000	10
13	井筒屋	滝川	6,000-7,000	30
14	ひさご	野尻	6,000-7,000	30
15	鶴屋 (休業中)	山崎	6,000-7,000	20
16	上東 (休業中)	湯の原	6,000-7,000	10
17	五月	武蔵	6,200-7,200	25
18	山ざく	小原	6,200-7,200	22
19	かたやま	小原	6,200-7,200	20

20	あけぼの	小原	6,200-7,200	18
21	ますや館	小原	6,000-7,000	15
22	吉本	折立	6,000-7,000	30
23	千景	込の上	6,000-7,000	15
24	大和屋 (宿泊のみ)	平谷	3,200-4,200	30
25	松の家	平谷	6,200-7,200	34
26	いでゆ	平谷	6,200-7,200	10
27	深瀬	出谷	6,000-7,000	10
28	二津野	七色	6,000-7,000	28
29	うらしま	上葛川	6,000-7,000	30
30	やまびこ	神下	6,000-7,000	12
計				625

1994年4月1日現在。十津川村観光協会(1994)により作成。料金はサービス料込み、税別で大人1人2食付き。着色は温泉のある施設。

表4 2020年の民宿

	民宿名	住所	宿泊料金(円)	収容人員
1	リヴァー	宇宮原	7,020-	15
2	杉の原	谷瀬	7,150-	12
3	農家民宿 信ちゃん	沼田原	7,500	1組限定
4	農家民宿 政所	五百瀬	7,500-	6
5	農家民宿 山本	内野	7,800-	6
6	ますや	川津	7,800-	16
7	香	風屋	7,000-	15
8	津川	風屋	7,600-	28
9	かたやま	小原	6,200-	20
10	中村屋	武蔵	7,850-	15
11	吉本屋	折立	7,000-	25
12	千景	込の上	7,000-	10
13	やまとや	平谷	7,400-	45
14	松乃家	平谷	7,300-	18
15	行者民宿 太陽の湯	平谷	8,950-	28
計				259

2020年4月8日現在。十津川村観光協会ウェブサイト掲載情報により作成。料金はサービス料・入湯料・税込みで大人1人2食付き。着色は温泉のある施設。

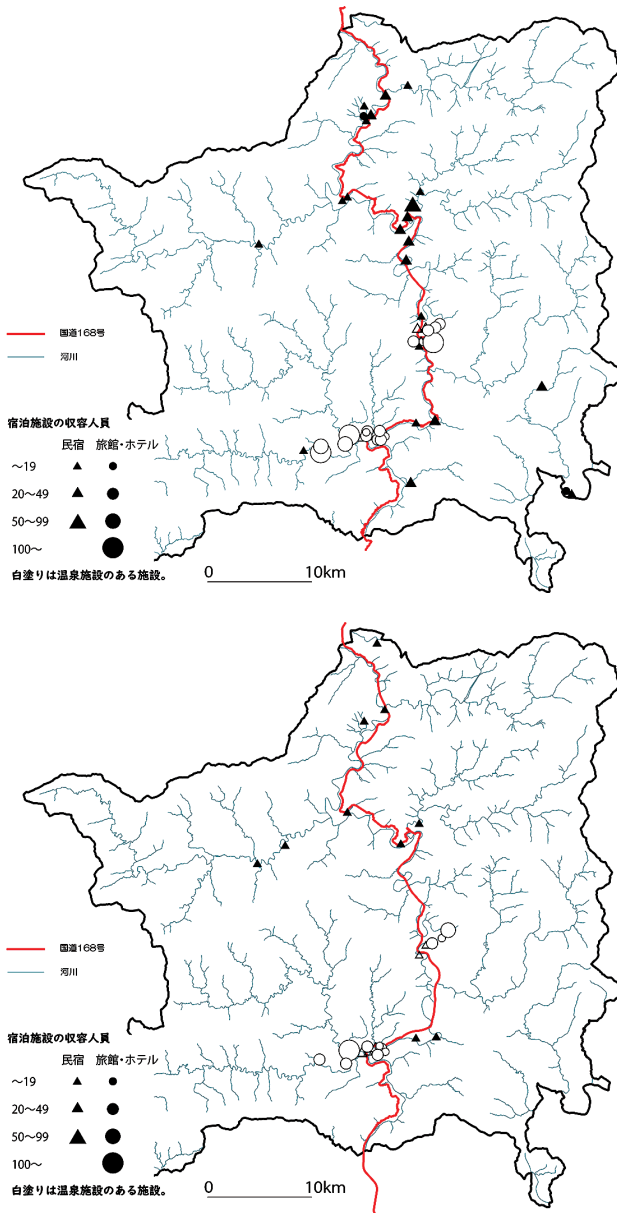


図4 宿泊施設の分布（上が1994年，下が2020年）  
 十津川村観光協会（1994）および十津川村観光協会ウェブサイト掲載情報により作成。

### 3. 湯泉地温泉の歴史と現状

#### 3.1. 湯泉地温泉の概要

湯泉地温泉は、十津川村のほぼ中央にある。三村区の大字武蔵と大字湯之原の境にある湯之谷（図5の①周辺）のすぐ西の十津川本流左岸にある、大字武蔵の湯泉地に湧出している。温泉施設の源泉には現在、「やど湯の里」の独自源泉と、それ以外の宿泊施設・公衆浴場等が共同で用いている源泉の2つがある。他に、「やど湯の里」付近の道路沿いの露頭や、十津川の河床などにも湧出が確認できる。周辺の地質は、日高川層丹生ノ川累層の堆積岩から構成されており、温泉湧出箇所付近には白色沈

殿物の付着や白色粘土化、石英細脈、珪化・酸化物質などが見られる（花室ほか、2008）。

湯泉地温泉には2019年段階で、公衆浴場2つのほか、旅館・ホテル5軒、民宿2軒がある（ただしホテル1軒が2020年1月に閉館）。また、道の駅「十津川郷」には足湯もある。湯泉地と本来称するのは、源泉等のある「やど湯の里」周辺であるが、湯泉地温泉の温泉施設は大字武蔵と大字小原の2大字にまたがって細長く分布している（図5）。大字武蔵では、十津川左岸を通る村道湯泉地線（1982年の湯之原バイパス開通までは国道168号であった）沿いに、図5の①の湯之谷から、源泉や②のある湯泉地を経て、③④⑤や公衆浴場「泉湯」のある平瀬集落まで温泉施設が点在している。大字小原では、十津川左岸にある十津川村役場や道の駅「十津川郷」、⑥などのある現国道168号沿い（ここも平瀬と呼ばれる）と、そこから平瀬橋を渡った十津川右岸の公衆浴場「滝の湯」、および⑦のある上舟原集落に温泉施設がある。

泉質は単純硫黄泉で、源泉温度は約60℃となっている。リウマチ、神経痛、慢性婦人病、皮膚病などに効能があるとされている。

#### 3.2. 第二次世界大戦前の歴史

湯泉地温泉の名は、現在の泉源の近くにあった東泉寺に由来すると推定されており（永島、1961）、古くから湯が湧き出ていることによる（堀井、1961a）。1791年（寛政3年）の「大和名所図会」には、武蔵村（現在の大字武蔵）に東泉寺温泉とあり、他に湯ノ原村（現在の大字湯之原）に湯原温泉とあるが、後者はその後の水害で失われている。

1658年（明暦4年）の『東泉寺縁起』によると、東泉寺は温泉の守り仏である薬師如来を本尊として建立された。この縁起については、奈良県教育委員会事務局文化財保存課編（1961）に、全文が漢文であり修飾の多い縁起文であるため、抄訳が掲載されている。訳者は明示されていないが、ここに再掲する。

”大和葛城郡茅原の里に生まれた役行者が大峯を開き、天照大神をはじめ、熊野大神・玉置大神らの嘉納をうけて大峯修行の四十二の位階を定めた。役行者が十津川の流を分け行ったところ霊窟があり、その勝景はまこと薬師如来の住居にふさわしい。そこで加持祈願をおこなったところ、湯薬が湧出した。すなわち湯谷（筆者注：前述の湯ノ谷）のおこりである。そののち、弘法大師が弘仁末年（筆者注：824年）から天長初年（筆者注：同じく824年）にあたって大峯修行をなされたとき、ここ湯谷の深谷において先蹤をたずね、薬師如来を造顕された（本尊の出現である）。ところが宝徳二年（筆者注：1450年）八月七日、地震によって湯脈が変わり、武蔵の里に湧出した。しかし、或る時、獵師が武蔵のこの湯を

汚したので、湯脈は再び十津川の本流に還った。里人、ようやく湯葉の妙を知り、この湯に傷病を医した。天下の貴賤、このよしを聞き、輦輿舟筏（れんよしゅうばつ）をかりてこの湯に雲集した。そして本尊薬師如来に香花を供え、報謝して去るを例とした。”

その後、ここは湯治場として知られるようになった。著名人が遠方から傷病の治癒などのために訪れた記録が残されている（永島、1961）。1552年には本願寺の僧が、現在の奈良県下市町にある願行寺から3日かけて湯治に来た。巡錫した際の、末寺衆からの勧めによるものであったという。また、織田信長に追放されて高野山にいた佐久間信盛が1581年に、本願寺門跡顕如上人が1586年に訪れた。郡山城主の豊臣秀保も1595年に訪れたが、誤って川に落ちたか殺害されたかで死亡している。

1688年（元禄元年）には「東泉寺古図」が描かれている。林（1994）によると、湯泉地の旧状を描いたこの古図は、東泉寺の湯を修復した時の見取り図と修復費を示している。修復費は三村区の6大字が工面したという。また、林は、「各棟の名所から見ると、一般に開放されていたのは『入込之湯屋』だけだったように思われる。これらの建物はすべて今よりはずっと下にあったことは云うまでもないが、明治の水害（筆者注：1889年に発生した十津川大水害）によって押し流されたりして潰滅、その後も国道建設などによってこのあたりは随分と削られ、今はすっかり地形が変わってしまっている。図に記された武蔵への道は今もあるが、現在の湯の里の前の急な石段はその後のものである」と述べている。



図5 湯泉地温泉付近の地図 国土地理院の地理院地図および基盤地図情報を用いて焦自然が作成し河本が一部修正。

東泉寺古図写し

元禄二年(1688)



図6 東泉寺古図写し 林 (1994) より転載。

昭和54年12月19日 現在  
湯泉地温泉

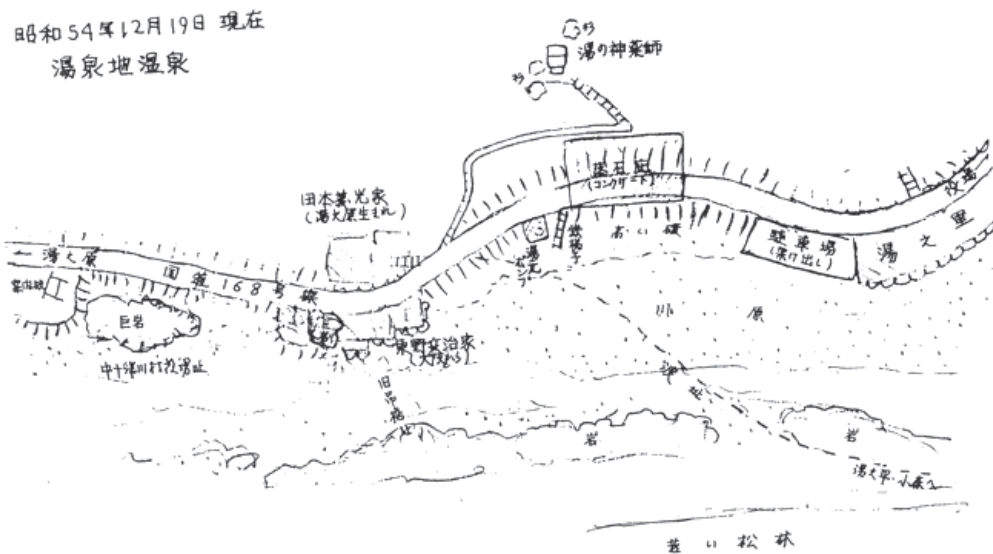


図7 1979年の湯泉地 林 (1994) より転載。上が南である。

1889年に発生した十津川大水害は、湯泉地の景観を一変させた。宮本 (1942) は、次のように変化を記している。引用は、一部の仮名遣いと漢字を改めて転載した宮本 (1961) による。

“湯泉地のあたりも実にすごいような峡谷で、今は深き川底に没しているホソリというところは一丈一尺の材木を横にすると兩岸につかえたという。しかも水面から底までは三丈もある淵で、それが七八町もつづいていたのである。北山川の瀨八丁など問題でなかったというのがここできた老人の自慢で、実に狭く深い谷であった

らしい。湯泉地の旧温泉のあったのはその流にそうた所で、今の温泉は百尺ばかりも上にあり、見あげるような崖だったのでこれを利用しようとする者もなかったという。それが下の温泉は完全に埋まって、シキ (川底) は四十間も高くなって、高いと思った上の温泉が、ちょうどよい川岸になったという。これには宿の主人も相槌をうっていたからまんざら誇張ばかりではあるまい。こうして十津川の峡谷は修正され今見るような広々とした川原を持つに至ったのである。しかも大崩の後の小崩壊は今日まで相ついでおり、十年くらいまえまでは年々川床

の高くなるのが目に見えたという。”

西田(1954)も、1889年発生の十津川大水害前は「浴室二棟、客舎数棟、其他商店軒を列べて、薬師堂あり、中十津川村役場あり」と相当賑やかで活気があったが、土地の崩壊流没によって往年の面影をとどめていないとしている。

なお、東泉寺を継承した「湯の神薬師」は現存する。林(1994)に掲載されている1979年12月時点の湯泉地の手描き地図(図6)には、やど湯の里(図では湯之里)近くにそれが描かれている。「田本義光家の一寸下手から石段を登ってコンクリートの落石シードの上に出、そこから鋭角に左折すれば段々道を少し登ってその前が出る。山際の石積みの基壇上に新しい祠が大川に面して建ち、その辺りだけやや太い杉の木が3本際立っている。鎮座は昔からで、かつての東泉寺の後身らしく、20年毎に遷宮が行われ、3年前にも造宮した。湯泉地温泉の守護神である。祭りは毎年正月8日、三村区6大字と役場、それにここから湯を引いている湯の里、十津川荘、武蔵、中村などの旅館や民宿が寄って餅撒きをし、持ち回りの宿でご馳走をする」とある。現在は田本家も道向かいにあった東野家もなくなり、「湯の神薬師」は田本家の跡地に湯神神社として移転している。祭りは毎年続けられている。

### 3.3. 温泉地としての戦後の推移

十津川村は長く陸上交通が徒歩と舟運のみであったが、五條からの西熊野街道(現在の国道168号)が徐々に整備され、1947年には湯泉地温泉にバスが入るようになった(堀井, 1961b)。

村報におけるこの地の初出は、1955年6月の湯泉地における村内医師会の開催である。次は1956年5月の、電源開発に伴う流筏補償や漁業補償に関する調査に関する打ち合わせである。このように、1948年に大字小森の山上から移転してきた十津川村役場に近い湯泉地は、村における重要な会議の開催地という性格をもっていた。

観光に関する初出は1957年12月で、電源開発に伴う公共補償要求の中に「観光」が位置づけられ、「湯泉地、下湯温泉の開発」として次のように記されている。

イ、湯之谷横坑より排出するずりを利用して、湯之谷口に敷地を造成して村に提供すること。

ロ、湯泉地温泉を折立へ、下湯温泉を平谷へ夫々導湯されたい。

また、1958年10月の村報に掲載された定例村会における後木村長の村政報告には、「湯泉地温泉を開発するため湯泉地附近に敷地を造成してもらうように申し入っていますが、作るとすれば湯之谷口のズリをつかつて二百坪位はできると思います」とある。湯之谷は、十津川の支流の名称であり、その流れる谷の名称であり、当時

存在していた集落の名称でもある。湯之谷口は、十津川本流と支流である湯之谷との合流地点付近(現在の「湯乃谷 千慶」周辺)を指す。湯之谷には、風屋ダム湖から十津川第二発電所に至る導水路トンネルが通っており、その建設が当時進められていた。また当時、十津川本流の各所で風屋ダム建設工事などに用いる骨材の採取がおこなわれ、濁水が流れ、水生昆虫や藻類などの生態系に大きな影響を与えていた(御勢, 1961; 渡辺, 1961)。現在の小原郵便局(大字武蔵の平瀬集落)周辺の十津川の川原でも砂の採掘がおこなわれていた。

上治(1959)は十津川村の「平谷西方の上湯及下湯、湯泉地付近の湧泉の3ヶ所」を調査した結果、「何れも数ヶ所から湧出し、泉量豊富、泉温30-65℃、泉質単純泉、炭酸泉、重詰泉。硫黄泉など数多ある見込みである」としている。当時は、「湧泉地えは自動車を通じ得るも、調査当時は未だ温泉は開発されるに至らず、十津川峡谷の渓谷中の湧泉であるという外はないが、泉量の多量なること泉温の高きこと、及び峡谷の景観、大規模なる電源開発がスピード的に進行しつつあるなどを総合し、この温泉が開発されて世に紹介されることは近きにありとの感を深くした」(原文ママ)といった状況であった。

1961年には後木村長の施政演説において、「観光事業については、昨年度は国道沿いに桜を植えたのみで余り進まなかつたが、本村の観光は、やはり温泉中心に考えねばならぬと考え、この開発を早急にやりたいと考える。そのためには、村で温泉権を取ることにし」とあった。同年には温泉開発に2,550万円の予算が計上された。うち下湯温泉のボーリング費および鉱泉権の買収費が2,000万円、湯泉地温泉のボーリング費および導湯費が550万円であった。これらの大半をなす2,300万円は電源開発の補償金であった。

1963年には、湯泉地温泉の引湯、使用について、村と三村区との間で下記の契約を結ぶことが確認された(1963年10月の村報)。

1. 村が設置した温泉の採取施設及引湯管を三村区に無償で譲渡する。
2. 温泉採取量は村と三村区と各半量づつの所有とする。
3. 村の所有分の内村で必要とする以外のもの利用については双方協議してきめる。
4. 採取及引湯施設の管理は三村区が行うが、この施設は第三者に譲渡又は貸与してはならない
5. 維持管理及改修費等の分担金については双方協議してきめる。
6. 三村区は公衆浴場と旅館に限り温泉を供給する。

翌1964年には引湯施設が整備された。その後、湯泉地温泉をめぐる、村にはボーリング、小原への導湯、公衆浴場建設の陳情がなされた。

時代は下って1981年の村議会では導湯施設の老朽化に



ともなう改修の必要性、1982年の村議会では引湯施設のパイプが老朽し破損が頻繁で地元から改修の要請があるが調整が遅れていることなどが報告されている。

1982年11月には、1978年4月に着工していた国道168号の湯之原バイパス（小原～小井間の小井工区の一部）が開通した。小原～湯之原間はおよそ10分の1の時間で結ばれ、湯泉地温泉の旧国道は村道となった。また、翌年11月には奈良県・和歌山県・三重県の知事が集った紀伊半島知事会議が「やど湯の里」で開催された。

1984年には、観光事業を推進するため「近畿の保養基地」を目指して十津川温泉郷として国民保養温泉地の指定を受ける動きが本格化した。奈良県温泉審議会が「十津川温泉郷国民保養温泉地計画書」を審議し、計画の概要を承認した後、十津川温泉郷は1985年に環境庁が指定する国民保養温泉地になった。

1987年3月15日には、礼宮文仁親王さまが学習院大学自然文化研究会の研修旅行で、後に文仁親王妃紀子さまとなる川嶋紀子さんらご学友など27人とともに十津川村を訪れた。この日は「やど湯の里」に宿泊した。その様子については当時の担当が小西（1989）にまとめている。

1989年7月には、小原郵便局の十津川本流側に、村が湯泉地河川公園（平瀬河川公園とも呼ばれた）をオープンさせた。テニスコートを中心にした公園で、湯泉地温泉の活性化を狙っていたが、2011年に発生した十津川大水害で流失し現存しない。

この公園の周辺整備として、公衆浴場の整備等が国に働きかけられ、国民保健温泉事業として「湯泉地温泉休憩所」の新築工事も着工された。1990年4月の村報には、「湯泉地温泉に公衆浴場を備えた休憩所を建設中であり、完成をまぢかにしております」とある。1990年6月にはこれがオープンした。現在の「泉湯」である。十津川村観光協会（1994）によると、当時の「湯泉地公衆浴場」は隣接する和田商店が管理しており、利用料金は大人400円・子供200円、営業は午前10時から午後8時30分で、休業は1月1日・2日のみであった。また、1990年6月の村報には、「この休憩所（公衆浴場）は既設の公衆浴場が老朽化したため新築されたもので、屋内風呂の他男性用、女性用共に露天の岩風呂が付き、それぞれ十名程度が一度に利用できます」とある。それまでの公衆浴場は、和田商店の南西側の現在ガレージなどとして利用されている場所にあった。同店が管理していた。

1991年8月には、湯泉地温泉の掘削を早急に実施するよう、三村区温泉運営委員会から村に対し要望書が提出された。1963年の掘削から時間がたち、「最近著しく湯量が減少して現在附近の自然に湧き出している少量の湯を取り集めて」配湯している状態であること、3軒の民宿希望者から配湯の希望があり現利用者からも増量の希望があるが現状では対応できないことなどから、早急な

調査・掘削を願う旨が記されている。同年12月には、三村区有・大字武蔵所有の湯泉地温泉の利用者代表からそれぞれ、村に対して温泉ボーリング工事に伴う温泉の若干の濁り（泥水混入）に関して、同工事の公共性の観点から、ろ過装置の取り付けなど工事の進捗を妨げる要求を行わない旨の同意書が提出されている。

1994年の10月から12月にかけて、温泉動力装置の工事が行われた。深度は300m、泉温58℃、湧出量（揚湯量）576m<sup>3</sup>/日であった。また、95年の1月から3月にかけて、温泉パイプ敷設および添架の工事も行われた。

1995年2月には、村により温泉使用料等徴収規則が定められた。十津川温泉管理条例および湯泉地温泉管理条例の規定に基づくもので、「温泉の使用量は、温泉の掘削工事、引湯工事、施設の維持管理及び配湯等に関する経費を考慮して、村長が定める」とこととされている。温泉の配湯または増量の許可を受けたものは、1口（1日50石）当たり75万円の加入金を支払うこととなっている。

1995年11月には、村の依頼で株式会社地熱が湯泉地温泉の源泉状況の調査を行った。これは、「湯泉地の源泉温度が完成当初58℃であったが現在53℃であるので見て欲しい」との依頼であった（株式会社地熱、1995）。その結果、源泉揚湯量380ℓ/分、泉温53℃であることが確認された。泉温低下の要因としては、①施設設置当初の連続運転が自動運転に切り替えられており、貯湯槽の水位により時々停止する際に一時的に泉温が低下する、②水中モーターポンプなどの動力揚湯は地下の温泉脈より水位を下げて強制的に揚湯するので地下の温泉脈に地下水が混入すれば泉温は下がる、③泉温及び推移には季節変動があるのも無視できない、とされている。

なお、湯泉地温泉の1995年度の使用料は、民間4軒が月額3万5千円、同3軒が7万円（うち1軒は8月分から17万5千円）、1軒が10万5千円（8月分から14万円）、1軒が17万5千円で、これに役場2口（用地施設課）の3万5千円、公衆12口（観光課）の21万円を加えた合計1,162万円であった。ちなみに十津川温泉は、月額で民間の1軒が2万円、3軒が4万円、4軒が6万円、3軒が8万円、2軒がゼロ（民間計744万円）に、泉の郷の128万円、公衆浴場の12万円、憩の家を6万円を加えた、合計2,496万円であった。

1996年第一回定例村議会では、湯泉地温泉事業基金を設置するにあたり、条例が制定された（村報1996年4月号）。また、1996年3月に社団法人日本温泉協会からの依頼で、温泉の集中管理実施状況について村が県を通じて報告している。これによると、湯泉地温泉および十津川温泉は、いずれも事業主体2、源泉数2である。湯泉地温泉は、総採取量700ℓ/m<sup>3</sup>、泉質は単純硫黄泉、供給施設数は宿泊施設11軒、公衆浴場1軒、源泉所有者は区である。費用負担方法は温泉利用については温泉使用料

金、施設建設は県補助、運営は温泉使用料金である。実施の背景は「温泉資源の貴重性（特殊性）」で、「実施過程の問題点或いは紛争等及び解決方法」には「区（自治会）との話し合いで決定」と記されている。ちなみに十津川温泉は、総採取量800ℓ/m<sup>3</sup>、泉質はナトリウム炭酸水素塩泉、供給施設数は宿泊施設11軒、公衆浴場2軒、病院1軒、源泉所有者は十津川村である。費用負担方法は温泉利用については温泉使用料金、施設建設は村単独、運営は温泉使用料金である。実施の背景は「温泉資源の貴重性（特殊性）」で、「実施過程の問題点或いは紛争等及び解決方法」には「宿泊施設業者との話し合いで決定」と記されている。

1997年2月には、温泉水の窃盗事件が発生した。大阪府堺市の企業が府内の老人ホームに温泉を無料共有するべく、村内企業の紹介で、河川敷に自噴している温泉を、泉源権を持つ三村区の許可を得ずにポンプでくみ上げているのが見つかった。2回目ということであった。

同年4月には道の駅「十津川郷」がオープンした。湯泉地温泉の足湯のほか、駐車場、トイレ、公衆電話、休憩コーナー、総合観光案内所、特産品販売コーナー、そば処「行仙」、「喜茶店」とも表記された喫茶店（軽減税率に伴うイートインスペースの対応が困難なため2019年3月で営業終了）が設置された。また、山道具等の民具や筏の模型、「からくりシアター」などをもつ、十津川村の民俗資料を収集展示した「むかし館」も設けられた。

また、閉館した滝見荘の跡地において公衆浴場の整備が進められた。目的は、村民の健全な保養と健康保持増進及び観光客の誘致を図ることであった。既存施設を部分的に活かす形で、1999年8月10日に湯泉地温泉浴場「滝の湯」がオープンした。

その後、湯泉地温泉1号源泉設備として、2002年に温泉送湯用の渦巻きポンプが、2004年に挙湯用のラインポンプが、新品に交換された。2号源泉設備については、1994年に温泉給湯用のタービンポンプが常時自動運転およびバックアップ機のそれぞれについて設置され、2004年に挙湯用の水中ポンプ（常用機）が設置されている。また、2009年3月には「滝の湯」がリニューアルオープンした。

ところが、2011年8月末からの台風12号による紀伊半島大水害発生は、湯泉地温泉にも大きな被害をもたらした。湯泉地河川公園は流失した。また、十津川沿いの一乃湯ホテルは、1階から3階までが使えなくなった。しかし、同ホテル（上層階を使用）や、他の宿泊施設の一部では、報道関係者や復旧・復興に向けた工事の関係者に積極的に宿泊・滞り場所を提供した。風呂の多くは沸かし湯での対応となった。公衆浴場2つも沸かし湯での対応を余儀なくされた。源泉2つのうち1つについては、同年9月10日に仮復旧し、引湯が再開された。

村では状況を打開すべく、同年11月から「復興観光プロモーション事業」等を行い、東京、大阪、名古屋、奈良等で誘客に努め、村や温泉の復活をアピールした。さらに、「被災地温泉施設復旧事業」として、2012年7月23日から2013年3月20日まで、約1億4千万円をかけ、「安定した給湯を行うため、被災した送湯ポンプ室移設と引湯管の復旧工事を行った」（十津川村、2014）。また、2013年6月24日には、山口建設長殿作業所安全協力会から、公衆浴場「泉湯」にシャワー付き混合水栓6台とひのき湯桶6個が、「滝の湯」にひのき湯桶12個が寄贈された。このように、湯泉地温泉は地域住民と行政、そして全国の支援の力を合わせた形で復興してきた。

### 3.4. 湯泉地温泉の現状

湯泉地温泉には2019年時点で、公衆浴場2つのほか、旅館5軒、民宿2軒があった。2020年4月時点では旅館（ホテル）1軒が廃業となり、また旅館1軒が休業中であるが、本稿ではこれらも扱う。また、前述のとおり道の駅「十津川郷」に足湯も設けられている。以下では、公衆浴場・宿泊施設を中心に、観光客、地域づくりの視点も交えて、湯泉地温泉の現状を記す。

#### 3.4.1. 公衆浴場

現在、湯泉地温泉には2つの公衆浴場がある。いずれも日帰り入浴の施設である。

「滝の湯」は、1999年8月10日にオープンした。露天風呂（外湯）と内湯があり、露天風呂までは長い階段を下りて移動する。露天風呂の脇には天然の滝がある。露天・内湯ともに、非循環のかけ流しになっている。施設は、廃業した民間の旅館を改装したもので、食事処、休憩コーナーが併設されている。2009年には十津川産木材を多用する形でリニューアルされた。その際、バリアフリーを考慮し、内湯は1階から2階に移された。また、内湯から露天風呂まで着替えなしに往き来できるようになった。2020年11月現在の利用料金は、大人800円、小人400円で、営業時間は午前8:00～午後9:00、休業日は木曜日である。図9を見ると、5月や8月の利用者が多く、7月は少ない。また、年別の利用者数（図9）には増加傾向が見られる。

「泉湯」は、1990年6月1日にオープンした。4～5人が入れる内風呂と、崖上にある岩囲みの露天風呂を備えており、眼下に十津川が流れている。食事処はないものの、地元客を中心に多数が利用している。2020年11月現在の利用料金は、大人500円、小人250円で、営業時間は午前10:00～午後9:00、休業日は火曜日である。図9を見ると、5月や8月の利用者が多いものの、7月や冬季は少ない。年別にみた利用者数は毎年変化が小さいが、滝の湯と比較すると、利用者数が少ない（図9）。



図8 公衆浴場「滝の湯」  
2019年6月16日，焦自然撮影。

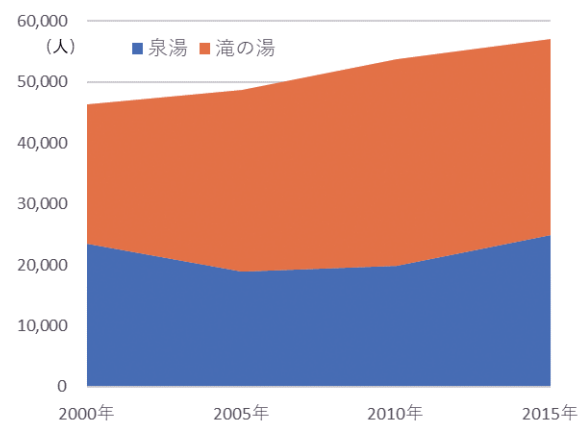
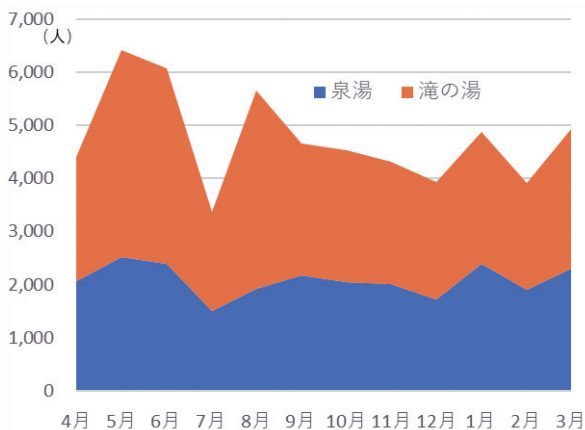


図9 公衆浴場の利用者数（上：2015年度の月別，下：年別）十津川村観光協会調査資料による。

### 3.4.2. 宿泊施設

2019年現在の湯泉地温泉の宿泊施設7軒の概要を，北東～南西の順に示す。

#### a. 湯乃谷 千慶

村内で建設業を営む株式会社今西組が2017年9月に開業した，村で最も高級な宿泊施設である。株式会社森組の生コン工場等であった約1,000坪の敷地に，宿泊用に9棟が設けられている。施設は，奈良県産の木材を用いて建てられた。客室は和室6室，和洋室2室で，全室露天風呂・内風呂付きである。また，サウナ付きの男性と女性の大浴場も各1棟ある。

料理の素材は地のものを重視しているが，村内だけでは調達に難しいため，黒毛和種雌牛未經産に限定した三重県産美熊野牛や，和歌山県の新鮮な魚介類，地元産ジビエや山菜などを含む，紀伊半島一円のものを使用している。

利用客は外国人，特に欧米からが多い。また，日本人を含め，車で来る人が多い。関西国際空港や南紀白浜空港からタクシーで直接来る客もある。レンタルサイクル（1回千円）も楽しめる。

湯泉地温泉の知名度が低いことが悩みとなっており，この温泉の質のよさを宣伝することに注力している。また，湯泉地温泉には土産物がほとんどないため，温泉水を主成分とする化粧水などを開発している。



図10 湯乃谷 千慶  
2019年6月16日，焦自然撮影。

#### b. やど湯の里

湯泉地温泉の源泉から約10mという，源泉に最も近い位置にある宿である。湯の質・温度・鮮度が保たれているのが自慢である。現在の当主の祖父が戦後まもなく創業した。十津川を見下ろすように断崖に立地する建物は，鉄筋一部木造の3階建てである。

「こゝは奈良県十津川村とうせんじ温泉でやどの名前を湯の里と申します」と記された看板が玄関口にあり，

建物壁面には「名も知らぬ小鳥とひたる露天の湯」と大書されている(図11上)。

和室6室から十津川や対岸の森林等の眺望が得られる。また、部屋の名前は十津川村で長男・次男・三男のことを指す「太郎」「次郎」「三郎」のほか「伯母」「父」などを採用している。料理は、鮎の刺身、ボタン鍋、しか鍋など、地のものが活かされている。

家族で経営しており、先代主人は、湯泉地温泉をはじめとする歴史に詳しく、資料をまとめて小西(1987)などの形で残している。1983年11月10日には奈良県・和歌山県・三重県の知事が集った紀伊半島知事会議がここで開催された。1987年3月15日には、秋篠宮(礼宮)文仁親王が川嶋紀子氏(後の文仁親王妃紀子様)ら学友とともに宿泊するなど、著名人のファンも多かった。現在も、宿の風情や経営者一家の人柄にひかれた日本人の常連客が多い。



図11 やど湯の里

2020年2月18日、河本大地撮影。1枚目は、館内に掲示されている1987年の秋篠宮(礼宮)文仁親王ご宿泊時の写真。2枚目は部屋から望む十津川。粉雪が舞っている。

### c. 十津川荘

1957年の創業である。売りに出していた家屋を、大字武蔵に居住していた現経営者の父親が1956年に購入し、新婚の頃に開業した。その後、1960年頃に増築されている。

和室8室がある。広間は50名収容可能である。各種宴会等に用いられてきた。また、趣を異にする2か所の露天風呂、家族風呂、男風呂、女風呂を備えており、男風呂、女風呂以外は貸切風呂となっている。2017年までは日帰り湯も運営していた。

夫妻で経営しており、手作りの料理が好評である。十津川村の食材を使った、山菜や川魚料理が中心である。春から秋は川魚料理、冬はボタン鍋やキジ鍋である。利用は観光客が主である。



図12 十津川荘

2019年8月6日、河本大地撮影。

### d. 民宿中村屋

現在は3代目の経営で、元の旅館は大字小原の現・十津川第一小学校の下にあり、温泉施設は備えていなかった。1970年頃に現在の場所に移転し、旅館中村屋として開業した。その後、旅館と民宿の管理基準の違いを考慮し、民宿に変更した。夫妻で経営しており夫が料理を担当している。

2019年に改装され、部屋の総数は変わらないもののダ

ブルームを増やした。改装は十津川産の松の木を使用して行われた。

利用客は関西圏のビジネス顧客（電源開発）の長期滞在が中心である。食事は牡丹鍋を中心に臨機応変に対応している。休日を中心に観光客の宿泊も受け入れている。



図13 民宿中村屋の建物と牡丹鍋

上は2019年6月16日，焦自然撮影。下は2018年11月2日，河本大地撮影。

#### e. 旅館むさし

大字平谷で飲食店を営んでいたが、二津野ダムの建設で水没することとなり、現在の場所に移転し1963年から営業している。創業当初は電源開発の関係者が多く宿泊していた。当時は周辺（平瀬集落）には4軒しか家がなく、小原郵便局の隣にはコンクリートプラントが設けられていたという。

施設としては、和室6室がある。常連客が多く、アットホームな雰囲気を大事にしているため、少数の宿泊客であっても貸切にすることもある。食事には定評がある。自炊設備はないため湯治場としては利用できない。近隣住民の入浴は以前から無料にしていたが、2019年4月より有料になった。

基本は高齢の夫妻2人で運営しているが、家族の手伝いやパートやアルバイトの雇用もある。ただし、2020年

現在は休業中である。



図14 旅館むさしの料理。

2016年11月19日，河本大地撮影。

#### f. 十津川温泉 一乃湯ホテル

村内最大規模のホテルであった。大阪府河南町などで観光牧場等を営む有限会社ワールド牧場が運営していたが、2020年1月15日をもって閉業した。十津川村役場から近い道の駅「十津川郷」の隣にあり、ビジネス客が多く宿泊していた。2011年に発生した紀伊半島大水害の復興工事や報道の関係者も多く利用した。また、大型観光バスを利用したツアー客が宿泊することも以前は多かった。

十津川に面した急斜面に建てられており、全室から川が見えることが売りのひとつであった。しかし、2011年に発生した紀伊半島大水害の影響は大きかった。1階のバーは完全に損壊し、2階と3階の露天風呂と客室は利用できない状態となった。その後、3階については従業員の寮として改装され、4階に露天風呂が設けられた。



図15 平瀬橋から望む「十津川温泉 一乃湯ホテル」（中央）と道の駅「十津川郷」（左）

2019年11月13日，河本大地撮影。

### g.温泉民宿 かたやま

創業年は不明であるが、1935年頃の大字小原の上舟原・下舟原集落には、前身である片山旅館を含め4つの旅館があった。利用客は主に十津川村内各地からやってくる村議会議員と村内外のビジネス客で、いずれの旅館も温泉施設は有していなかった。現在、片山旅館が「温泉民宿かたやま」となり、後述する中村屋が大字武蔵の平瀬集落に移転開業し、他の2施設は閉館している。

2004年に改修が完了し、現在は和室7室となっている。客室の多くは6畳で、1室のみ8畳である。露天風呂は1999年の別館改修時に設置されたものである。十津川産の木材を、ニスや塗料なしに自然のままに利用している。

家族で経営しており、十津川産の食材を中心とした料理を提供している。宿泊者の大半は、じゃらん・楽天など大手宿泊予約サイト経由の日本人である。

ただし、10年ほど前から湯泉地温泉の出湯量が減少しており、泉源から最も離れていることもあって影響がみられるという。



図16 温泉民宿 かたやま

2020年12月8日、藤重季恵氏撮影。

### 3.5. 小括と展望

湯泉地温泉は、十津川村で最も古い温泉地であり、源泉周辺から十津川に沿って旅館・民宿が点在している。静かで山峡の情緒を味わえる環境に対しては、“癒される”との評価が高い。旅館や民宿は家族経営がほとんどであり、当地の季節食材を使用した料理を味わうことで宿泊客は宿に親近感を得ることができる。また、周辺には良質な自然環境や歴史文化的資源も多い。

しかし、利用客の減少は現在の課題になっている。一乃湯の閉館や旅館経営者の高齢化、従業員不足など、近年の湯泉地温泉は多くの経営上の問題を抱えている。それぞれの宿が離れているため、温泉地としての活気にも乏しい。

新興の温泉地である十津川温泉と比較した際の、温泉地としての位置づけも憂慮される。観光客の中には、十

津川村の温泉は十津川温泉、十津川温泉郷イコール十津川温泉ととらえる人もいる。多くの観光客が湯泉地温泉よりも十津川温泉に宿泊する傾向が生じている。その要因として、玉置神社、瀨峡、果無集落、野猿など十津川村南部の観光地や、和歌山県田辺市・新宮市・那智勝浦町などの観光地から距離があることは考えられる。また、公共交通機関にも課題が見られる。奈良交通運営の観光バスは十津川温泉を中心に運行しているため、湯泉地温泉を訪れる観光客にとっては不便である。バス停は現在、十津川村役場の横にしかなく、多くの宿泊施設までは公共交通機関利用の場合は徒歩を余儀なくされる。しかも、そのバス停に湯泉地温泉のどこに何があるかを示す看板は設置されていない。足湯の設けられている道の駅「十津川郷」や、2つの公衆浴場にも、そうした看板はない。村が湯泉地温泉を観光資源として活用しきれていないとは、残念ながら言えない状況である。

湯泉地温泉の宿泊施設等の経営者は、この状況に危機感を抱いており、観光客に湯泉地温泉の良さをアピールしたいと考えている。自然豊かな地域にある歴史ある温泉地であること、そして泉質の良さは、観光客に十分アピールできると考えている。また、十津川のほとりて鳥のさえずりを聞きながら温泉を楽しめること、浴衣を着て泉湯と滝の湯を巡ることができるのは湯泉地温泉ならではのことであり、観光客がリラックスできる空間を提供できると思われる。それぞれの宿が離れていることは、徒歩でのハシゴには不便である一方で、車両の騒音は少なく、人混みも少ないことから、純粋に温泉を楽しみたい観光客にとっては、むしろ温泉の醍醐味を十分味わえる環境であると言える。湯泉地温泉は遠くから足を運んでも訪れる価値がある温泉地である。

今後は、温泉と他の観光資源とを融合させた、新しい取り組みが期待される。湯泉地温泉の宿泊施設と周辺の観光地とを一つの観光コースとして組み合わせ、観光客を誘致することは、湯泉地温泉の活性化につながると考えられる。例えば、歩く楽しみはもっと重視されてよい。湯泉地温泉は河川、森林、集落等の景観が美しい立地にある。また、神社など歴史文化的資産も有している。こうした環境を活かした散策コースをつくり、歩いた後に自然豊かな湯泉地温泉に泊まって疲れを癒してもらうことは、健康・美容を重視するヘルスツーリズムの観点からも可能性があると考えられる。各宿泊施設と各公衆浴場をつなぐ廉価な交通機関を運行させ、宿泊客には公衆浴場や他の温泉の利用料金をディスカウントするなどして複数の温泉をハシゴしやすくするなどの取り組みにも可能性がある。もしくは、湯泉地温泉の特徴である自然豊かで静かな地であるという強みに特化し、都会で働く人々の休日の過ごし方の一つとして、喧騒から離れた静かな温泉地で心身ともにリラックスするという観光プランを

提案するという考え方もあると思われる。さらに、湯泉地温泉としての土産物がほぼ皆無の状況も脱する必要がある。いずれにしても、それぞれの宿が協力し合い、行政も湯泉地温泉を村の中心に位置する観光地としてきちんと位置付け、滞在型の湯泉観光地としての魅力を向上させる必要がある。

## 4. 上湯温泉の歴史と現状

### 4.1. 上湯温泉の概要と歴史

上湯温泉は、大字出谷の下出谷集落にあり、18世紀前半に開湯したとされる。含硫黄ナトリウム炭酸水素塩泉で、皮膚病、アトピーなどに効くとされる。現在ある宿泊施設は旅館「神湯荘」のみである。また、上湯川畔の川原に「天然温泉露天風呂『上湯温泉』」がある。

この温泉は、18世紀前半の享保年間（1712～1736年）に里人が発見したと伝わる。当時の状況についての記録として、平凡社編（1981）の「出谷村」の項では、畔田伴存が江戸時代に記した「吉野郡名山図志」の「十津川荘西川出谷温泉之記」が引用されている。「丸木橋ありて登り坂有、八町坂と云、嶮岨也、嶺有、嶺より八町の下り也、出谷村有、右二行は竜泉寺とて曹洞宗の寺は出谷村より四五丁谷を下り行は左の谷へ入温泉有、出谷の湯と云、湯治人籠小屋壺ヶ所藁葺式間二三間斗、夫より五六間左の山足溪間に温泉湧出而湯壺あれとも外屋なし、湯ハ熱こと湯崎先之湯のことく竜神の湯よりはるかに熱し、湯治人も来れ共、米価高くして雑用に不堪と云、此所籠屋の下ハ西方出谷川也、水源上湯の川奥山より出て出谷に來り西川ニ合して十津川に入、此川筋出谷温泉より上流にて温泉の湧出る処四十余ヶ所、温泉より下にも銀の湯と云有ゆへニ出谷の湯を金の湯と云、此温泉前籠屋より川辺をなかむれハ西の方小山たちかこひ佳景也、四月ころは流の内瀬立に河鹿彫して鳴て聞二堪たり」。当時の出谷川（上湯川のことと思われる）の上流に温泉の湧出する地点が40以上あり、出谷温泉と呼ばれていたことや、すでに湯治人が増えていたため米の値段も高くなったということがわかる。

長らく、主に地元住民が上湯川畔に天然湧出する湯を男女別の小さな浴槽に注ぎ、入浴してきた。堀井（1961a）は、「簡単なコンクリートの湯槽が設けられている」とし、写真も掲載している。ほかに、現在の上湯バス停付近には、1932年頃から木賃宿があった（名称は不明）。この宿は温泉を売りにしていたわけではなく、商人や山へ行く人の中継地としての役割を担っていた。当時は客がない日がないほど需要があったという。宿に内湯はなく、露天風呂に宿泊客が入りに行く形であった。しかし、1944年12月の昭和東南海地震で温泉が出にくくなり、次第に利用客も減り、12年ほどで営業を終了

した。その後、観光目的での利用や広報は皆無に近く、旧十津川村立出谷小学校（松野・河本・馬、2019を参照）に赴任していた元教員の多くも校区内に温泉があることを知らないままであったという。

観光目的での開発の嚆矢は、1960年前後にさかのぼる。前述の上治（1959）のほか、1961年7月には温泉開発のため京都大学教授の横山次郎氏が湯泉地、下湯、上湯の現地調査をおこなった。1964年10月には、住民ら3名と村との間で契約書が交わされ、この4名が費用負担する形で、村は同年11月から1965年8月にかけて大字出谷199番地において井戸掘削（ボーリング）をおこなった。150mほど掘り進めたものの所定の温度を得ることができず、同番地内の別の場所を掘ったところ、同年12月に深さ700mのところから68℃、900ℓ/日の湯が湧出した。村は温泉利用権を4人に移譲した。その後、分筆により登記は3名となった。

1975年10月には村から深瀬一夫氏（神湯荘）に対し、出谷200番地の温泉を11月から1日当たり50t以内で観光用（入浴用）に使用できることとした「温泉使用許可書」が出された。そして、11月に神湯荘が営業を開始した。

1985年3月には、村内3温泉地が「十津川温泉郷」として国民保養温泉地になった。1987年頃には、神湯荘が上湯川畔に露天風呂と上湯茶屋を設置した。その後、1992年8月の村温泉開発委員会および関係者の意見交換会では、神湯荘以外の者も温泉掘削をしたいとの申し出があったものの、村は泉源権を有しておらず応じられない旨の議論がなされている。1997年10月には、「親切」な場を形成するむらづくりの一つとして上湯温泉周辺が村によって観光拠点と位置づけられた。2000年頃には紙西徳千代氏らによる「ホテル徳秀苑」が開業したが、数年で営業を終了した。2002年12月には3温泉地の活性化を目指した温泉部会が立ち上げられた。2003年には、千葉博明氏による「出谷温泉公衆浴場『つるつる乃湯』」が開業した。2004年10月の観光セミナーで松田忠徳氏は、上湯温泉を利用することで「十津川に行けば美人になれる」点が女性に訴求できると述べた。

しかし、2011年の台風12号による紀伊半島大水害は、上湯温泉にも大きな被害をもたらした。特に、上湯川畔の露天風呂は、湯船のみならず進入路や駐車場も流され、休業を余儀なくされた。同年10月には、被害を受けた県南部の市町村を応援しようと奈良産業大学で模擬店が出された際、上湯温泉の温泉コーヒーの出店があったという。2017年には、地元の建設会社社長の乾敏志氏が私費を投じて上湯川畔の川原に「天然温泉露天風呂『上湯温泉』」を再開させた。

#### 4.2. 神湯荘

上湯温泉の唯一の旅館である神湯荘は、1975年11月に、同じ下出谷集落にあった民宿ふかせから分かれる形で開業した。

現在の正従業員は5名で、忙しい時には掃除、布団のセット、接待などの手伝いが入る。また、現在は本館に7部屋、別館に3部屋が宿泊用となっている。露天風呂は5か所、内湯が2か所ある。年間約1万人の利用客（日帰り入浴も含む）があり、紀伊半島大水害の影響で客数が減少した時期もあったが、ここ数年は安定している。

料理は、地産地消にこだわり、既製品を出さないことを大切にしている。野菜等は女将の実家で収穫されたものを使用している。2012年からは十津川水産とともに温泉水を活用したウナギの養殖も試みられている。

また、春には桜、夏にはホテル、川遊び、秋には紅葉、冬には雪景色と、春夏秋冬を感じられることを売りにしている。

紀伊半島大水害の被災からの復旧では、まず風呂の修理を建設会社社長の乾敏志氏の協力を得て行った。また、電話などの連絡手段が使えない中、女将が、大手宿泊予約サイトであるじゃらんネットで、神湯荘のPR活動を行った。さらに、水害によりほとんどホテルが見られなくなったが、ホテルの幼虫を放つことにより約5年で復活させた。



図17 神湯荘の露天風呂  
2018年5月に河本大地撮影。

#### 4.3. その他の施設

##### (1) 天然温泉露天風呂「上湯温泉」

2011年紀伊半島大水害発生により、神湯荘が営む川原の露天風呂は破損し休業していたが、長く復旧できないままであった。これを見かねた建設会社社長の乾敏志氏が、前述のとおり私費を投じて、2017年に天然温泉露天風呂「上湯温泉」として再開させた。

川沿いの大露天風呂（男性用）は4m×14mで、以前より約2m高くし、コンクリート造で強度も上げた。ま

た、源泉の直下にある女性用の風呂は周囲から見えないうようにした半露天の形で、幅4m、長さ2mの大きさである。9時から17時までの営業で、定休日は木曜日であり、料金は大人500円、小人300円である。平日はおおよそ10人の利用客が訪れる。風呂、道などの建設はすべて乾氏が行った。河原でバーベキューをすることも可能である。温泉の効能としては、アトピー、神経痛などによく効くことと、美肌になることが挙げられる。奈良市内から毎週訪れる女性客もいる。また、他の温泉と比べて湯冷めしにくいことも特徴である。バイクで入浴しに来た客が、五條市まで帰ってもまだ体が温かかったというエピソードもある。



図18 天然温泉露天風呂「上湯温泉」  
2019年3月に河本大地撮影。

##### (2) 出谷温泉公衆浴場「つるつる乃湯」

2003年に営業を開始した。しかし2011年の紀伊半島大水害の際に土砂崩れが起こり、現在は営業していない。天然温泉露天風呂「上湯温泉」の隣に建物や浴槽が現在も残っている。川沿いにある開放的な半露天の共同浴場で、その名の通りアルカリ性でつるつるする湯であった。地域の人や観光客に気軽に温泉に入ってもらいたいという思いから建設された。多いときには、1日50～60人が利用しに訪れ人気の温泉となっていた。源泉は上湯川の対岸から引き、つるつる乃湯の上（北側）の県道を経由し、そこから下ろす形で使用されていた。100m以上の距離からポンプで源泉を引いていた。ボーリングをして得た源泉ではなく、自然湧出のものを利用していた。湯にはたくさんの湯の花が浮いており、初めて訪れた客が「掃除をしていないのでは」と勘違いするほどであったという。湯の温度が日によって6～7度の差があり、調節にはかなり苦労していた。また、上湯川対岸に向けての野猿が主として林業用に設置されており、家族連れなどに人気のアトラクションとなっていた。しかし、この野猿も2011年紀伊半島大水害で損壊し現存しない。

##### (3) 徳秀苑

2000年頃にできたホテルである。営業期間は2、3年と短く、現在は建物だけが残っている。自前の温泉掘削



が困難をきたし、ホテル自体は温泉を所有しておらず、神湯荘にまかないを頼んで、宿だけを利用してもらう形で営業していた。「つるつる乃湯」のすぐそばの上湯川沿いに、徳秀苑の支配人が露天風呂を建設したが、「つるつる乃湯」の営業が開始するころには、既に使用されていなかったという。

#### 4.4. 今後に向けて

長く地域で暮らしている深瀬氏と乾氏によると、上湯温泉は「紀伊半島大水害から、見た目では復旧しているが本当の意味では復旧していない」。道路や施設などの復旧は進んだが、当たり前だった風景や、上湯川の水質が変わり、「自然の復旧は当面無理だ」と2人は話す。

こうした中、神湯荘では今後、温泉のポンプ量を上げ、風呂を増設し、顧客の満足度を上げたいと考えている。また、地域の自然条件を活かしたマンゴー栽培も検討している。川原の大露天風呂でも、施設営業の持続を最優先しつつも、女湯の露天風呂の設置を構想している。

「秘湯」として紹介されることも多い上湯温泉における新たな取り組みや価値の発信には、各所から期待の眼が注がれている。

### 5. 瀨峡の歴史と現状

#### 5.1. 瀨峡の概要

瀨峡は、飛び地を2つもつ和歌山県（北山村・新宮市）と、三重県（熊野市）と、奈良県（十津川村）の3県にまたがる（図19）。熊野川の支流である北山川の渓谷で、上流から順に「奥瀨」「上瀨」「下瀨」と呼ばれる。このうち「奥瀨」は、和歌山県北山村と三重県熊野市の境界をなす約28kmの区域を指す。1965年に完成した小森ダムの影響で多くの部分が水没しているが、ダムの下流側では「北山川観光筏下り」が行われている。「上瀨」は、その下流にある十津川村の東区の大字神下（こうか）の田戸集落までを指す。村の南東端にあたる。南流する葛川（くずがわ）がここで北山川に合流している。「下瀨」は、田戸集落から下流の区域を指す。下瀨の上流側の約1kmは奇石・巨石が並び、古くから観光スポット「瀨八丁」としても親しまれている。北山川は、瀨峡を抜けた後、和歌山県新宮市熊野川町宮井で十津川と合流して熊野川（新宮川）になり、和歌山県と三重県の県境を流れ、太平洋に流れ出る。

現在、瀨峡はジェット船や川舟を利用したり、周辺から眺望したりして景色を楽しむ観光地となっているが、以前は人や荷物の輸送路としての役割も担っていた。本章では、現在の観光地としての特性が確立される前の瀨峡も含めて記す。また、十津川村における瀨峡観光の拠点は田戸集落であることから、ここを中心に扱う。

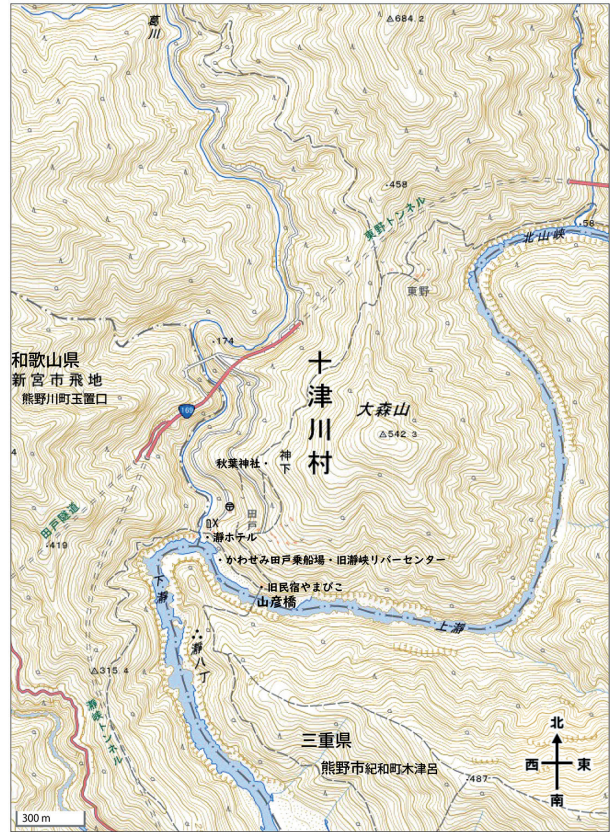


図19 瀨峡（田戸集落周辺）の地図

国土地理院の地理院地図を用いて河本大地が作成。

#### 5.2. 瀨峡の歴史

険しい山地に囲まれた熊野川流域の交通は、古くから川舟に頼ってきた。当初は帆を張ったこの地域独特の川舟であったが、1917年（大正6年）に「プロペラ船」の運行が始まった。明治以降、他の河川では機械化が進む中で、砂利の浅瀬が多い熊野川では、スクリュー船の運航は不可能だったことが関係している。プロペラ船は、わずか15cmの推進でも運航可能であり、それまでの川舟に比べるとはるかに速かったため、地域の貴重な足となり、郵便の輸送も引き受けるようになった。熊野交通株式会社（1974）によると、昭和の初めごろ、南紀地方の交通業界は小企業が乱立しており、その中の熊野川飛行艇株式会社がプロペラ船を新宮～折立、新宮～瀨峡で運航していたとの記述がある。その後、本宮プロペラ船株式会社と十津川交通株式会社と那智登山自動車株式会社が合併し、1943年11月に熊野合同交通株式会社が設立された（のち1945年に熊野交通株式会社に改名）。

その後、プロペラ船は各地に活躍の幅を広げた。道路の開通が遅れた熊野川では、プロペラ船の最盛期には、十津川まで航路を伸ばし、昭和40年代まで地元の貴重な足として運行されていた。また1959年の紀勢本線全通後は紀南への観光客が激増し、瀨峡に向けての観光船としてプロペラ船の活躍が続いた。「熊野交通30年史」には、

この時期の観光は、「新宮から瀨峡へ、そして宮井まで引き返し、今度は十津川へ入って湯の峰温泉泊り、翌日、本宮大社に詣って帰る1泊2日のコース」があったと記録されている。

プロペラ船からウォータージェット船への転換には「沿線の道路が開通したこと」が関係している。道路交通が発達したことで、陸路の移動が便利になり、プロペラ船は衰退した。さらに、熊野川上流のダム建設が進むにつれ、瀨峡がなくなるとのうわさが流れ、1963年をピークに観光客が減少しだした。この現状を打破しようと考えだされたのが「ジェット船」である。船の構造を大きく変え、新宮～瀨峡間を3時間45分で往復できるようになり、1976年に志古～瀨峡間の運行に短縮され、現在に至る。運航は、2019年10月から熊野交通株式会社等の再編により、熊野観光開発株式会社がおこなっている。プロペラ船は小川口航路に使用されていたが、1972年に廃船した。

田戸は瀨峡観光の中心拠点であり、現在もジェット船や川舟の停泊や、喫茶店があるなどにぎわっているように見える。駐在所や郵便局がある集落であるが、約25戸ある家屋のうち、常住は4戸であり、住民は高齢者ばかりである。比較的新しい家屋がみられる一方で、車が通れない道が大半である。

田戸の集落はかつて、筏師（いかだし）と呼ばれる、山で切り出した材木で筏を組んで運ぶ職業の人々が宿泊する地として、旅館などを中心ににぎわいを見せていた。しかし、筏師の数が減少することにより田戸の宿泊施設も衰退し、旅館はなくなってしまった。

田戸の現地調査では、林（1994）に記載のあった1967年から1981年にかけての田戸集落の地図と現在の住宅地図を見比べながら、当時の住宅や旅館の有無や位置関係の分析を行った。特に2019年11月10日の秋葉神社の例大祭時には、住民6名に聞き取りを行った。

林（1994）に掲載された1981年の地図では、田戸集落には人が住んでいる家屋が11戸、無住家屋が6戸あった。田戸の住民の集会所であった「クラブ」の記載もある。さらに、現在も残る瀨ホテルや、民宿やまびこ、瀨亭が宿泊施設として記されている。家屋に関しては現在、先述の通り、常住しているのは4戸であり、12戸の空き家が確認できる。そのうちの数戸は倒壊寸前の状態であり、田戸集落の厳しい現状がうかがえる。家々への徒歩道は、常住している家屋への道を除き、草木が生い茂り、道であったであろう跡を歩くしかなかった。宿泊施設に関しては、正式な資料は残っていないものの、田戸集落の方々からお話を伺うことができた。かつて、田戸には主に筏師が宿泊する「西旅館」「瀨亭」「民宿やまびこ」「瀨ホテル」の4施設があった。このうち西旅館は、現在の五条警察署瀨駐在所の位置にあった。当時、周辺は町の

ように栄えていたという。「瀨亭」については、残念ながら詳細はわからなかった。建物自体は当時からあったが、営業していた記憶はないという。「瀨亭」はその後に診療所（現在は閉所）ができる際に解体されたという。「民宿やまびこ」は、1980年に創業し、2005年頃から休業し、2018年に閉館した。場所は、山彦橋のたもとであり、2棟あるうちの1棟を民宿として活用していた。現在は家屋として用いられている。

また、1967年から「瀨峡リバーセンター」の運営も行われていた。プロペラ船やジェット船に乗って田戸にやってきた観光客に、新宮などから仕入れてきた特産品や、鮎の塩焼き、アイスクリーム、サツキの苗などをテントで販売していた。最盛期には10店舗あったが、2018年で営業を終了した。

### 5.3. 瀨峡の観光をめぐる現状

現在の瀨峡の観光に関連する事項は、熊野観光開発株式会社が運航する瀨峡ウォータージェット船、川舟観光かわせみが運営する瀨峡遊覧船、そして瀨ホテルである。

ウォータージェット船は、和歌山県新宮市熊野川町志古から搭乗し、瀨峡をめぐる出発地に戻るコースと、途中の三重県熊野市紀和町小川口から乗降するコースがある。所要時間はそれぞれ1時間55分と1時間であり、1日に6便運航されている。また、乗船場までの路線バスである「瀨峡連絡バス」もあり、主に和歌山の本宮方面や那智勝浦からの観光客を瀨峡に観光できるように整備されている。最近では和歌山や大阪からの観光客が多いようである。国道の整備により十津川方面にも抜けやすくなり、ウォータージェット船に乗った後に谷瀬の吊り橋等に向かう観光客が多くなっている。日帰りの観光客が目立つ。宿泊する場合は、和歌山県那智勝浦町の勝浦温泉の場合が多いという。また、近年は、インバウンド観光も増えつつある。ツアー旅行や個人旅行でも、特に台湾からの観光客が目立つ。関西空港・伊丹空港から伊勢神宮を参拝したのち、瀨峡にやってくるルートをとることが多い。彼らは和歌山県田辺市本宮町の川湯温泉に宿泊し、翌日に和歌山県新宮市へ向かう。なお、後述の理由により、2021年1月1日をもって瀨峡ウォータージェット船事業は休止されることとなった。

「川舟観光かわせみ」では、田戸のリバーセンターのあった川原を発着場として、約30分間の遊覧を楽しむことができる。こちらは少人数の観光に特化している。中国・欧米・台湾など海外からの口コミによって「かわせみ」の川舟が広まったという。関西圏からの観光客は、十津川村で十津川温泉や谷瀬のつり橋を観光した後に、田戸に足を運ぶ場合が多いという。そのほかの観光ルートとして、和歌山県田辺市本宮町の熊野本宮大社を参拝した後に田戸を訪れる例も挙げられる。

「瀨ホテル」(図20)は、宿泊施設としては2004年に開業したものの、2013年から喫茶店として営業している。筏師のための旅館として、1917年(大正6年)に「あづまや」として開業した。「あづまや」は「招仙閣」と名を変え、昭和初期には「瀨ホテル」の名称になったという。瀨峡を訪れる観光客は、関西圏からが最も多く、続いて東海、関東地方であるという。国道169号をはじめとする近隣の道路が整備され、田戸を訪れる観光客自体は増加した。



図20 瀨ホテル(右)と北山川の瀨八丁(下瀨)  
2019年6月16日、河本大地撮影。

#### 5.4. 災害を乗り越え、未来へ

瀨峡周辺は、2011年に発生した紀伊半島大水害で大きな被害を受けた地域の一つである。瀨峡の観光の主となるのはジェット船や川舟による遊覧であるが、これらは災害の影響を強く受ける。

昔の川舟の運転者は、「東の風が続いたら雨が降る。田辺のほうからくる風は雨をあまり降らせない」という知識をもち、天気と付き合ってきた。川の水位で川舟もジェット船も運航の可否を決めるようで、今も天気との付き合い方に頭を悩ませている。「川舟観光かわせみ」は2019年も霧の影響で2回休航を余儀なくされた。「災害の影響が多く出てしまうが、雨が降らないと美しい瀨峡の景色は生み出されないし、雨がある程度降らないと舟を運転できない。うまく付き合っていきたい」と「かわせみ」の東福万氏は言う。

ジェット船の運航については、2011年の紀伊半島大水害では、新しく建て直したばかりの志古の乗り場が被害にあった。1階の天井まで水につかった。その後、新たに乗り場がつくられ、この水害を忘れないよう入口にモニュメントが設置された。熊野観光開発株式会社の堀芳生氏によると、最近ではゲリラ豪雨のように「雨が降る・降らない」の差が激しく、その対応に追われてきた。大雨で落ち葉が川に詰まって流れない、大雨で発着場がつかず、水が引いた後に砂利が移動して運航できないなど

の問題がある。また、ジェット船の運航には少なくとも水深80cmは必要だが、冬場は水不足で運航が困難な状況にある。氏は、「自然相手だから対応にも限界がある。ゲリラ豪雨や台風はどうしようもない。これまでもこのようなことはあっただろうし、これからも起こるだろうけれど、人の命が最優先であることを念頭において、営業や復旧作業に取り組みたい」と話していた。同社が2020年12月1日付で発出した「瀨峡ウォータージェット船事業の休止について」という文書には、「2011年の『紀伊半島大水害』以降、ウォータージェット船が航行する熊野川及び北山川に流入する土砂が年々増加し、自社による航路整備の作業効率が著しく悪化しており、航路維持にかかる労力が過大となっております。このような状況下、弊社では各種作業や運営方法の見直しを行い、事業存続に向けて全社一丸となって努力してまいりましたが、作業員の高齢化に加え、今般の新型コロナウイルス感染拡大の影響によるお客さまの減少もあり、(中略)事業を休止することといたしました」と記されている。

田戸集落も2011年の紀伊半島大水害の被害を受けた。瀨ホテルは下層階が被災し修理を余儀なくされた。また、本館の西の吊り橋は損壊し、現在もそのままである。北山川は増水し、山彦橋がかかっている部分まで水が上がった。深く川幅もある河川の増水から、紀伊半島大水害による被害の大きさは容易に想像できる。田戸では、紀伊半島大水害を風化させないように、水位が上昇した到達点に看板を立て、これからの水害に備えている。

「かわせみ」を営業する東福万氏は「新しい人を田戸に呼ばなければならない。若い人がアイデアを出せばよい。これまで田戸にいた人は、今まで自分たちが行ってきたことに誇りを持ち、それをやり続ければよい。自分がある間に、この仕事が新しいものにつながってほしい」と話す。瀨ホテル4代目の東達也氏は、「本館から吊り橋(2011年に損壊)を渡った和歌山県側にある別館も、いずれ修理して使えるようにしたい。旅館としての経営も考えている」と話す。

瀨峡観光に「瀨八丁」は欠かせない。田戸に瀨ホテルのような宿泊施設ができることによって、新たな観光コースの誕生が期待できる。十津川村を観光し、瀨八丁に赴き宿泊する形が定着すれば、田戸のかつての賑わいも戻ってくるのではなかろうか。

## 6. おわりに

本研究の目的は、奈良県吉野郡十津川村におけるツーリズム（観光）の展開の経緯や特徴と現状を明らかにし、今後を展望することであった。村全体のツーリズムの概要を整理したうえで、主要観光地のうち湯泉地温泉・上湯温泉・瀨峡の事例を中心に扱った。

十津川村におけるツーリズムは長い歴史をもつ。特に湯泉地温泉には、16世紀には著名人が多く訪ねていたことがわかっている。深い山峡のいで湯や溪谷を愛でる来訪者が従来から見られた。

とはいえ、村のツーリズムは、本格的には1960年代のダム建設をはじめとする電源開発にともなう自動車道の整備や、北山川のプロペラ船・ジェット船をはじめとする航路開発など、交通網の発達を契機に展開してきた。観光施設の充実した1990年前後には、バブル経済の影響も受け、多くの宿泊者があった。しかし、その後は村を挙げての十津川温泉郷のPRや温泉を中心とした施設整備にもかかわらず、宿泊者は当時の半数以下にまで減少している。宿泊施設の数と収容人員数も大きく減少した。2011年に発生した紀伊半島大水害も打撃となった。土木建設業を中心とする復興需要や村のPRにより、宿泊者数は幾分回復したものの、近年はまた減少に転じている。さらに、交通アクセスがよくなり、宿泊者よりも日帰り客のほうがはるかに多い状況にある。

その間に、日本人の観光行動は、団体ツアーから個人や小グループの旅行に比重が移っている。また、インバウンドツーリズムの興隆もあった。十津川村では、ユネスコの世界文化遺産の構成資産のひとつである熊野参詣道（熊野古道）小辺路の歩行者が、特に外国人に関して増えた。また、同じく世界遺産の大峯奥駈道の沿道の玉置神社も、新たな客層を獲得している。

こうした中、従来なかった高価格帯の旅館や、複数の農家民宿など、新たな宿泊施設も少数ながら生まれている。また、本稿で取り上げた3つの観光地では、個々の事業者が「泊まり甲斐」や「立ち寄り甲斐」のある施設になるよう、工夫を凝らした経営を続けてきた。

しかし、観光地としてのエアーマネジメントの視点は弱い状況にある。湯泉地温泉では、源泉管理の組織はあるものの、温泉地としての観光・地域づくりを意識した組織的行動はあまりとられてこなかった。この点は十津川温泉のほうが進んでいる。上湯温泉や瀨峡も、地域社会の過疎化・高齢化が著しく進行し、観光事業者は僅少になり、地域そのものの在り方が問われている。

今後は、交通アクセスがよくなることで、いっそう宿泊者数が減少する懸念がある。日帰り客ばかりでは、村外の人に村の奥深い魅力に触れてもらえないし、お金が村に落ちず観光関連産業が成り立ちにくい。現に宿泊施

設の数は減少しており、経営者の高齢化に伴うさらなる宿泊施設減少も危惧される。さらに2020年には、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）対策に伴う客数減や経営者負担増も経験した。こうした課題は構造的であり、個々の事業者の努力のみで状況を好転させるのは難しい。

そこで最後に、3つの提案をして本稿を閉じたい。第一に、村行政は各観光地の将来を成り行き任せにせず、また都市部のコンサルタント等に依存するのではなく、村内外の若者を交えた形でエアーマネジメントを組織的に検討したほうがよい。地域としてどうありたいかというビジョンを明確化し、具体的に時間的・空間的な計画に落とし込む必要がある。特に湯泉地温泉では、温泉地としての情緒や回遊性をどうつくるかが課題である。

第二に、十津川村民自身が村を積極的にとらえ、村外の人に案内・紹介できるよう、機会を積極的につくったほうがよい。学校教育における地域学習を充実させ、子どもたちや教員が村の価値を実感し地域表現力を向上させ村外に発信する能力を育むとともに（河本，2020）、十津川村民全員が上湯温泉や瀨峡などの観光を経験しているという状態にしたい。

第三は、人や地域のネットワークとその可視化である。本研究で取り上げた観光地や宿泊施設は、ここを選んで経営あるいは観光する個性的な人々の存在で成り立っている。十津川村のツーリズムをめぐる人的つながりや、観光客の周遊形態を可視化すると、様々な可能性が開けてくると思われる。この点はツーリズム研究・観光地域研究における今後の課題でもある。

## 謝辞

本研究は、十津川村史編纂事業の一環として、十津川村教育委員会のご協力を得て実施しました。現地調査にてお世話になりましたみなさまに、特に長時間の聞き取りにご協力いただきました各宿泊施設や地域のみなさまに、厚くお礼申し上げます。また、学芸員の藤重季恵さま、南隆哲さまをはじめとする十津川村教育委員会のみなさまにも、調査の便宜を多々図っていただきました。感謝申し上げます。

執筆は、焦と胡が第3章の第4節・第5節を、保坂が第4章を、嶋田が第5章を担当した後に、河本がそれらを加筆修正し、その他の章・節を含めた全体をとりまとめました。

本稿の骨子は、2020年6月28日の2020年度地域地理科学学会大会（岡山大学）、および2020年9月12日の地域活性学会第12回研究大会（オンライン）で発表しました。

## 参考文献

- 上治寅次郎 (1959) : 奈良県十津川温泉について. 温泉科学, 10-2, pp.29-32.
- 株式会社地熱 (1995) : 『湯泉地源泉状況調査報告書』 株式会社地熱, 3p.
- 熊野交通株式会社 (1974) : 『熊野交通30年誌』 熊野交通株式会社.
- 河本大地 (2020) : ESDでみるへき地教育の在り方. 日本教育大学協会研究年報, 38, pp.91-103.
- 河本大地・劉丹・馬鵬飛 (2018) : 山間地域におけるグリーンツーリズムと世界遺産観光の持続可能性—熊野古道(小辺路)の通る奈良県十津川村神納川区の事例から—. 奈良教育大学紀要, 67, 91-103.
- 河本大地・劉丹・馬鵬飛 (2019) : 十津川温泉誌—温泉地としての歴史と現状—. 奈良教育大学紀要, 68-1, pp.125-145.
- 小西朗 (1987) : 『湯泉地温泉物語』 やど湯の里.
- 小西朗 (1989) : 『礼宮様御来村—宿湯の里での宮様について—』 やど湯の里.
- 御勢久右衛門 (1961) : 十津川村の水生昆虫. 奈良県教育委員会事務局文化財保存課編 : 『十津川』 奈良県吉野郡十津川村役場, pp.278-287.
- 十津川村 (2014) : 『紀伊半島大水害—平成23年台風第12号による災害—十津川村の被害と復興への記録—』 十津川村.
- 十津川村観光協会 (1994) : 『1994年度版—十津川村観光情報—』 十津川村観光協会.
- 永島福太郎 (1961) : 十津川郷の成立. 奈良県教育委員会事務局文化財保存課編 : 『十津川』 奈良県吉野郡十津川村役場, pp.705-740.
- 奈良県教育委員会事務局文化財保存課編 (1961) : 『十津川』 奈良県吉野郡十津川村役場.
- 西田正俊 (1954) : 『十津川郷』 十津川村史編輯所.
- 花室孝広・梅田浩司・高島勲・根岸義光 (2008) : 紀伊半島南部, 本宮および十津川地域の温泉周辺の熱水活動史. 岩石鉱物科学, 37-2, pp. 27-38.
- 林宏 (1994) : 『林宏—十津川郷探訪録—民俗3』 十津川村教育委員会.
- 平凡社編 (1981) : 『日本歴史地名大系 第30巻—奈良県の地名—』 平凡社.
- 堀井甚一郎 (1961a) : 概観. 奈良県教育委員会事務局文化財保存課編 : 『十津川』 奈良県吉野郡十津川村役場, pp.1-36.
- 堀井甚一郎 (1961b) : 交通. 奈良県教育委員会事務局文化財保存課編 : 『十津川』 奈良県吉野郡十津川村役場, pp.169-190.
- 松野哲哉・河本大地・馬鵬飛 (2019) : 山間地域における1960年代の「へき地教育」の性格—奈良県十津川村の大字出谷の事例を中心に—. 奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要, 5, pp.175-184.
- 宮本常一 (1942) : 『吉野西奥民俗探訪』 アチック・ミュージアム.
- 宮本常一 (1961) : 村の変遷. 奈良県教育委員会事務局文化財保存課編 : 『十津川』 奈良県吉野郡十津川村役場, pp.365-376.
- 渡辺仁治 (1961) : 十津川の藻類植生. 奈良県教育委員会事務局文化財保存課編 : 『十津川』 奈良県吉野郡十津川村役場, pp.288-297.